

坂本龍馬のように、生まれた日も亡くなった日も同じ11月15日という例もありますから、特別とは言えないでしょうが、菅原道真という人は何の巡り合わせか、25日に縁があります。下記の通り、「誕生日」と「命日」に加え、左遷決定となったのも同じ25日でした。

承和12年(845)6月25日	菅原道真が誕生
昌泰4年(901)1月25日	だざいごんのそつ 太宰権師への左遷(実質は筑紫国への流罪)が決まる
延喜3年(903)2月25日	太宰府の配所で死去

さらに、菅原氏というのは土師氏(道真の曾祖父・土師古^{ふるんど}人)が改姓して始まった一族ですが、改姓の許可を得たのは天応元年(781)6月25日で、これは道真の誕生日と同じなのです。

【土師氏】天皇の葬送に関わることが職務。土師器や埴輪の製作、あるいは古墳造営も担当した。

菅原氏の他、秋篠氏・大枝氏(大江氏)・志紀氏(または丹治比^{たじひ}氏)なども分立した。

さて、道真については太宰府に流罪となるまでの出世物語があまりにも有名ですが、その地で2年後に没した後に、「天神さま」として祀られるようになる経緯にも興味深いものがあります。即ち、「天神信仰」と呼ばれるものですが、1100年後の今に続く一大信仰となっているのです。

この天神信仰の元となっているものが「御^{ごりょう}霊^{おとし}信仰」です。これは、無実の罪に貶められて悲憤のうちに亡くなられた霊をお慰めし、鎮めようとする信仰のことです。現代風に言うなら、道真は冤罪^{えんざい}事件の被害者です。控訴もできず、当然ながら、再審理も行なわれませんでした。慰霊や鎮魂の対象となることも一理はあります。けれども、実在した人物が神になるというのはやはり異例ですね。道真は時の支配者でもなく、有能な政治家に過ぎなかったわけですから。

怨^み霊騒動……道真が亡くなってからは、世の中を不安に落とす事件が次々と起きました。

最初は早魃^{かんばつ}(日照り)と疫病(天然痘)の流行で、続いて不吉な現象と見なされた彗星が現われました。これだけでも十分に騒然となりますが、さらに、道真の政敵であった藤原時平や皇太子保明親王(時平の甥)も病気で亡くなりました。市中の人々は、「これは菅公(=道真)の怨みの表われであり、崇りに違いない」と噂をし、怖れるようになりました。(『日本紀略』)

その後も早魃や疾病蔓延は続き、道真左遷に加担した貴族の死亡が相次いだので、醍醐天皇は延喜23年(923)4月20日に^{みことり}詔(菅原道真の官位を元の右大臣に戻し、正二位を追贈し、延喜3年の左遷の命令は破棄する)を出すほどでした。要するに、左遷した朝廷側の非を認め、道真の名誉を回復させたわけです。これは道真が亡くなってから20年目のことでした。

しかし、道真の霊は鎮まるどころか、延長8年(930)6月26日、極め付きの事件が起きます。即ち、清涼殿に落雷し、大納言・藤原清貫など3名が亡くなったのです。「北野天神縁起絵巻」では黒雲と雷鳴、憤怒の形相の雷神と逃げ惑う貴族たちが描かれ、ことに有名な場面ですね。

醍醐天皇も、このショックからか病床に臥されて、3ヵ月後の9月29日に薨去されます。朝廷の驚きようは想像以上のものがありますが、朝廷を牛耳った藤原氏に反感を抱く貴族たちや道真の門弟たち、そして一般庶民などは「それみたことか」と心中快哉を叫んだことでしょう。

余談ながら、この日本史上最も有名な落雷(と言っても過言でない)のあった6月26日は、今日では「雷記念日」とされているのですよ。

だざいごんのそつ
太宰権師

権師というのは「定員外の長官」というような意味で、右大臣よりも一位低い官位となります。あくまでも左遷人事のために仮に設けられた肩書ですから、職務も権限も部下も無いわけです。つまり、太宰府行きは降格・転勤の形をとっていますが、実質は流罪であることは明白です。

現地での道真は、淨妙院という荒れ寺に幽閉されていたも同然でした。要するに、監視付きの軟禁状態に置かれたということですね。仕事を与えられないものですから、和歌を詠むなどして自らを慰めてはいたものの、やはり失意のうちに、2年後にその地で亡くなったわけです。

太宰府天満宮と北野天満宮

共に道真を祀る天満宮ですが、両社間には何ら関係がありません。結論を端的に申しますと、**太宰府天満宮**は**霊廟(=墓)**としての、片や**北野天満宮**は**御霊社(=魂鎮め)**としてのものです。それぞれの創建の経緯を見ましても全く性格が異なるわけです。

太宰府天満宮の創建は、道真を埋葬するところから始まります。道真が亡くなった時、遺骸を牛車に乗せて三笠郡四堂辺りの墓地に運ぼうとしたのですが、途中で牛が動かなくなりました。やむなくその地を墓地として埋葬し、**安楽寺**を建てたと伝わっています。

それからさらに2年後(延喜5年(905)8月19日)のこと、道真の門下生で京より随伴していた**味酒安行**が、その場所に社を建てたのです。これが太宰府天満宮の始まりです。

一方の北野天満宮ですが、こちらは道真による“夢のお告げ”(宣託)が元になっているのです。道真没後の或る日のこと、都に住む**多治比文子**(巷間の巫女だと見られている)の所に、道真が現われまして、「大内裏の北にある、右近の馬場に社殿を設けて祀るように。」と告げたわけです。文子は資力が乏しかったので言われた通りには出来ませんでした。天慶5年(942)7月12日、自宅の庭に形ばかりですけれども小さな祠を営んだのです。さらにまた、近江国比良宮の禰宜・**神良種**の所にも道真が現われ、やはり右近の馬場に社殿を設けるようにと告げました。

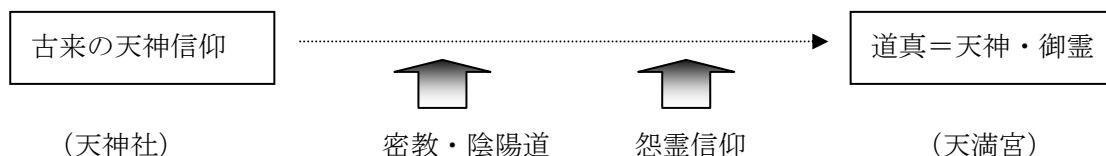
5年後(天曆元年(947)6月9日)、文子は神良種及び北野の朝日寺の僧・最鎮らの協力を得て、現在の北野の地に社殿が造営されたという次第です。これが北野天満宮の始まりとなりました。文子・神良種・最鎮という、社会的には無名の存在が活躍したというわけです。

尚、文子につきましては少し補足説明が必要です。多治比という姓から想像されますように、土師氏の一族(丹治比氏)とゆかりがあると言われます。それから、文子が自宅に営んだ祠が現在は**文子天満宮**(京都市下京区)という社になっています。その縁起には、社が北野天満宮の前身であることや**文子が道真の乳母**であることが記されています。ここで文子乳母説については確証が無いわけですが、多治比氏と菅原氏との間には氏族としてのつながりがあるようですし、さらに、道真の門弟には多治比姓の者が何人も居たことが分かっています。

ついでに言いますと、現在の北野天満宮の境内には文子天満宮という撰社が祀られています。北門から入ってすぐ左側にありますが、これは文子が祀った祠を、明治になってから移したものであるということです。その駒札には、北野天満宮発祥の社であると記されています。

<天神さま・天神信仰>

天神＝菅原道真という図式がごく当たり前のようにになりましたが、本来は全くの別物でした。結論から申しますと、下図のように、古来の伝統的な天神信仰が変容してしまったわけです。



今日では、歴史上で実在した人物の霊を祭神とする神社は数多くありますので、何ら不思議と思わないでしょうが、北野天満宮のように死者の霊を神として祀るということは、それ以前には全くありませんでした。つまり、菅原道真は、実在した人物の霊が神社に祀られた初の例です。

また北野天満宮は、明治維新の神仏分離政策によって純粋な神社になっていますが、かつては神仏習合の宮寺でした(11世紀初めからは比叡山延暦寺＝天台宗の系列化に置かれた)。従って、天台密教や陰陽道、神道など、多様な信仰が複合したものになっています。そのために、祭神は天満大自在天神(または天満大威徳天)という密教的な称号をっておりまして、牛の背に乗る、恐ろしい姿の像とされていました。尚、本地仏は十一面観音です。



霊を鎮める・慰霊すると言えば、平安京でもたびたび「^{ごりょうえ}御霊会」というものが催されました。これは、天台宗や真言宗の僧侶が祈祷を行なう仏教儀礼で、必要の都度行われる行事なのです。また、怨霊と御霊とを混同しがちですが、怨霊とは、厄災をもたらす疫神を退散させる力を持つことにより、初めて人を災害から守る御霊神となるのです。北野天満宮の場合も、社殿を設けて道真の怨霊を祀ることによって、信仰する人々を守るという御霊神に転化したわけです。

余談ながら、天満宮の象徴・神使いである牛は、何故か臥した(座った)姿になっています。ある学者の曰く、臥した姿である限りは動かない、つまり、道真が再び怨霊に戻らないようにと怨霊鎮めの呪術になっているとか。要するに、封印しているということらしい。



さて、天満宮を意味する「天神」という言葉は、本来は天上の鳴動する雷神を指すものでした。こうした雷神信仰が道真の怨霊の信仰と結び付いて、道真は雷の神「天神」と同一視されるようになったのです。尚、雷神は雨や水に関係するところから、代表的な農業神でもあります。

天神といえば即ち菅原道真、道真といえば即ち天満宮という構図ですが、こうなると、本来は道真とは無関係であった多くの天神社が天満宮と同一視されるようになり、むしろ北野天満宮が全国の天神社を吸収・統一化するようになったわけです。



菅原道真は、流行りの言葉を借りるとカリスマ的存在ですね。従来は天上や自然界に在って、特定されるものではなかった神というものが、人格を帯びるようになりました。道真＝天神像は神という存在で終わることなく、「文道の祖」「学問の神様」として偶像的存在となったのです。

芸能分野でも庶民からの支持は絶大で、歌舞伎や浄瑠璃の『菅原伝授手習鑑』などは、^{すがわらでんじゅてならいかのみ}『忠臣蔵』や『義経千本桜』と並んで三大傑作の一つに数えられているのは周知の通りです。